

# 米欧回覧

第12号  
編集・発行  
米欧回覧の会  
事務局

## 司馬史観をどうみるか—第十回例会—

### 熱気にこもる中村教授の講演と質疑

第十回の例会は、七月二十五日(土)午後一時より国際文化会館で、歴史グループの担当により行われた。

第一部の出席者は六十二名、浅沼晴男氏の司会により開催、最初に泉三郎氏より挨拶と会務についての全体報告があり、次いで各グループの幹事である「実記」の阿部賢一氏、「歴史」の半沢健市氏、「現未来」



の郡山史郎氏、「映像」の足立光正氏、「国際交流」の浅沼氏からそれぞれ報告があった。

午後一時半からは半沢氏の司会により、講演並びにディスカッションの部に入った。はじめに「司馬史観をどうみるか—歴史と小説」のテーマで歴史学者の中村政則氏より



講演があり、三時からはコービーブレイクをはさんで五時過ぎまで質疑ならびにブンブン方式の意見交換が行われた。

講演内容の面白さ、密度の高さに加え、会場からも活発な質問や意見の発表があり、歯に衣を着せぬ率直なもの、いかにユーモラスに飛び交い会場はしばしば爆笑につつまれた。

また、第二部の懇親パーティーは別室で五時半から、四十一名の出席を得て石川直義氏の司会で行われた。

参議院選挙と自民党総裁選の直後であったので、それについての話題も含め興味あるウイットに富んだスピーチが続出し、あらためて当会の多士済々ぶりを印象つけた。午後七時過ぎ塚本弘氏の挨拶で閉会した。

たまたま月刊「太陽」98/8月号に中村政則教授のエッセイが載っていますのでその一部をご紹介します。

それは吉田茂の側近といわれた白州次郎氏の話で、中村氏は偶然にも学生時代にアルバイト先のスポーツ店で白州氏に出会い強烈な印象をうけたといいます。

「背の高い英国風の紳士で、ぶっきらぼうな語り口と鋭い眼差しに威圧される思いであった」と記しています。

その白州次郎氏はケンブリッジに留学し、英語には不自由はなかったから、サンフランシスコの平和条約調印の時、吉田茂から演説草稿をみてくれといわれる

「みるとしゃくにさわったね、第一英語なんだ。占領がいい、感謝感激と書いてある。冗談いうなっというんだ。」そこで草稿を書き直させ日本語の演説に変えた。吉田の英語は知識は大したものだが発音が下手で何を言ってるか解らないし、加えて日本の首席全

## 豪気独立の日本人

泉三郎

権としての威厳を保つには日本語の方がいいと考えたからだという。

その白州次郎氏の晩年の言葉、石原慎太郎がその著「かくあれ祖国」に書き留めている。

「お前な、日本の役人の悪口ばかり言ってるけど、なかにはいいやつもいるぜ。ただ、外務省はダメだ、あんな奴らは男でもキン玉がついてねえ。バカが一番多いのは文部省だ。しかしGHQが必死につぶしにかかった内務省にはやはり強者がいたよ」

白州氏はGHQとの交渉の際に、「戦争に負けたけれど奴隷になつたわけじゃあない」といって、毅然とした態度を貫き通した。

中村氏は「戦後の国際システムの中で、日本が対米従属的な位置を占めている限り、日本の戦後は終わらない」という米国の歴史学者ブルー・カミングスの言葉を引き、「今ほど白州のような豪気独立の精神が求められるとまではない」とそのエッセイを結んでいます。

# 『司馬史観をどうみるか』——歴史と小説——

中村政則氏の講演の要約

## I 司馬を論ずること は日本の文化状況 を論ずること

日本近現代史を専門とする私が司馬論をやることになった契機は、「自由主義史観」が依拠するという司馬史観の検証だったが、両者に関係がないことが分かった。現在でも、司馬遼太郎への興味は続いている。

現在、ジャーナリズムの司馬神格化、カリスマ崇拜主義が強過ぎる。立花隆氏は「司馬遼太郎は司馬遷を抜いた」などと言っている。曾野綾子氏が週刊誌で司馬批判をしたら修正を迫られたという。二億冊を売った国民的作家といえども批判なき崇拜はよくない。といって単なる批判に終わっては意味がない。



批判には三段階あると私は考えている。

第一のレベルはイデオロギ的批判でレッテルの貼り合

第二レベルは内在的批判で、相手の論理に内在してその矛盾を突くものである。

第三のレベルは「相手の体系には自分の体系を」提示するという最高度の批判である。

私の司馬批判は戦後歴史学の成果を司馬史観に対置することになるだろう。

「司馬作品に何を学んだか」という政官財界人のエッセイで、橋本龍太郎ほかの人々が司馬から学んだことを語っているが、本当に何を学んだのかと思う。

ここに田辺聖子による司馬への弔辞があります。「敗戦このかた日本は、ある傾向のイデオロギーや思想の権力のもとに、かたよった認識を強いられて、歴史や伝統否定の風潮がみちていました。人々は祖国に落胆し、卑下してしまつたのです。昭和三十年代、司馬さんの歴史小説はそういう日本社会に躍り出ました。日本の窓をあけ新しい風と光をもたらしたのでした。本来の日本の持てる佳きもの、すばらしい伝統、そして日本民族のすぐれたところも足らぬところも、明晰に論理的に、



語りつくされました。」私はこの田辺の文章が好意的でもあり、平均的な司馬像を表現していると思う。



## II 司馬遼太郎の歴史 小説の方法

原点

司馬は、終戦間近か米軍の日本本土上陸に備える戦車隊の一員として栃木県佐野市にいた。東京から大八車を引いて人々が街道を逃げてくるのを見て、「これでは戦車は南下できない。どうすればよいのか」と問うたとき、上官が「ひき殺しても進め」と答えた。この時に「日本民族とはこういうものか」

「いつからこんなつまらない民族になつてしまつたのか」「日本人とは何か」ということが終生のテーマになつた、と司馬は書いている。これはゲーテやベートベンを生みワイマール憲法を持っていたドイツがナチズムへ転落していったのはなぜか、と同義の難問である。

司馬は「昭和はダメでも明治は違うだろう」と考えて幕末、維新の青年群像を描いた。しかし司馬は最後まで、この問題を解けなかつたといえる。

「統帥権」の乱用から日本は「魔法の森」へ迷い込んだというのが司馬の理解である。彼は「昭和初期は日本近代の異胎であり参謀本部は鬼胎であった」とした。しかし、これだけでは歴史的、理論的な説明とは言えない。



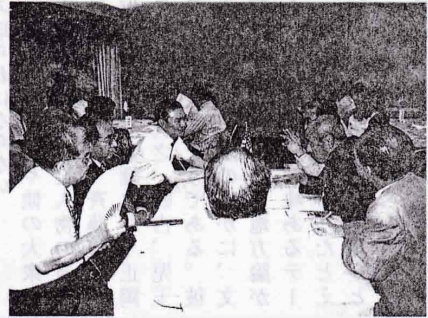
鳥瞰という方法

司馬はビルの屋上から

地上を見下ろすような視点で歴史を描いた。「歴史上の人物というものは、自分の運命をせいぜい半分ぐらいしか知らない。だから私は思ったんです。私の小説に出てくる人物より、私のほうが彼ら自身をわかっているんだと。後世とはそういうものです」。

（「坂の上の雲」秘話）

これに対し大岡昇平が「レイテ戦記」で、また妹尾河童が「少年H」で取った方法は「虫の目」で見える方法である。大岡はレイテ戦を全体としてとらえようと出発したが、「戦死した兵士の一人一人について、どこでどういう風に死んだか、数え上げることになっ



てきた」と言っている。そして「結局一番ひどい目に会ったのは、フィリピン人ではないか」という感慨に行き着いた。

司馬との違いはここにある。

史観と史眼

司馬は、マルクス主義史学、水戸史学、皇国史観などのイデオロギーで歴史をみることを排除した。

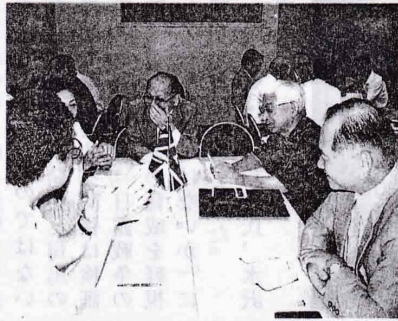
史観は歴史を掘り返す土木機械ではあってもそれ以上のものだと考えなかった。「史観が何であれ、ときには史観という機械を停めて手掘りにしたりしなければならぬ。考古学の発掘が、土木機械ではできないように、やはり歴史

史というものは、そういう具合に手掘りを加えたりしないと、うまくつかめない」

（「手掘り日本史」）。

私は「方法は史料に内在する」という考えを持っており、実践の経験から司馬の手掘り論に共感するところがある。

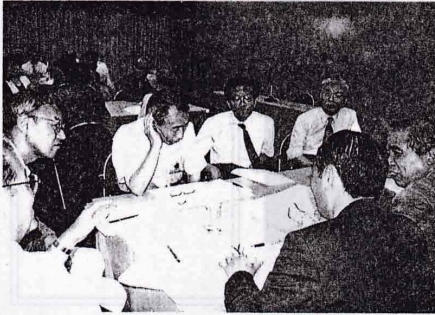
私の司馬論に対して、「司馬史観」などと言うものが一



体あるのか、という質問や批判がある。私は「史観」という体系的なものはないにしても、「明治ナショナリズムと国民国家」という強いイデオロギーあるいは「史眼」が、彼にはあると考えている。司馬の作品に流れているものは「国民国家の物語」である。「客観的に」といっても歴史を見るには、個人の的方法論が必ず入り込むものだ。

文体論と美学

司馬はジャーナリストとしての非常に機能的な文体を持つ。名文を書くことはしなかった。漱石の「則天去私」の解釈で「文章はものを表すためにだけあります」としているものの、彼の作品の中には「こういうことは史上かつてなかった」式のオーバーな表現が頻出する。そして読者を楽しませることに重点をおいて美しいものだけを書いた。残酷なことは書かない。土方歳三が尊攘派志士の拷問をしたことは書かないし、日露戦争で旅順虐殺事件があったことも無視して、日本兵士は「軍隊につきもの」の略奪事件は一件もおこさなかった」と不正確なことを書く。



歴史小説の三つのタイプには

- (1) 史料にとらわれずに作者の想像で勝手なことを書く、歴史は単なる素材に過ぎない。
- (2) 史実を尊重するが、作者の創造力を働かせて人物を造形する。
- (3) 事実にあくまで忠実に書く

（大岡昇平「堺港攘夷始末」）がある。

司馬は中間タイプといえるが、作品により異なる。

「坂の上の雲」は(2)に近い、「竜馬がゆく」は(3)に近い。

私は、河井継之助を主人公とする「峠」を調べてみて、河井と福澤諭吉が江戸城で会ったという重要な場面が史実でないことを知った。そして「作家はどこまで史実を離れて歴史小説を描きうるか」のテーマで考えそのことを論文に書いた。

（「司馬文学と歴史学——「峠」を中心に」上下、「神奈川大学評論」28・29号、1998年）

### Ⅲ 司馬史観

#### の問題点

#### 二項対立史観

司馬史観の問題点の一つに「明るい明治と暗い昭和」という二項対立史観がある。わかり易いがまことに単純で、日露戦争勝利まではよかったがその後悪くなった。第二次大戦の敗戦からまた良くなる、という四十年周期史観だが、これでは「大正デモクラシー」が的確にとらえきれない。

丸山真男にも明治の明るいナショナリズムへの高い評価があり（たとえば「陸羯南論」）、司馬と共通するところがある。しかし明治にすでに後の破綻の芽があったことはさちんど指摘している。

わたしは、世界的な大転換の中に「大正デモクラシー」と昭和初期を位置づけなければならぬと思ひ、カール・ポラニーの「大転換」を手掛かりに大恐慌への対処に関する世界各国の対応の差を考察し論文にしたことがある。

#### 晩年の司馬と彼の残したもの

#### 司馬の作品

品は高度成長期の経営者、サラリーマン、官僚たちを喜ばせた。司馬は自作の影響で、ある時期から日本が誤った方向へ進んで行くことに恐れ、懸念を感じ出したのではない。か。バブルの形成と崩壊の過程で、官僚も経営者も自己統治能力を失った。それを見て「このままいけば日本は滅びる」と、司馬の考えは危機意識に変わった。「土地と日本人」（1976年）、「この国のかたち」（1990年）などは、ある意味で司馬の自己批判の書として読むことができる。司馬の思考は時代とともに変化していったことを読み取らねばならない。

司馬は歴史家や他の大衆作家が描けなかった人物の造形に成功している。斉藤道三、坂本竜馬、河井継之助、正岡子規、秋山真之・好古、児玉源太郎などがそうである。彼の作品には小説のほかに、文論、戦後日本論、地方論があり、それぞれ興味あるテーマが提示されている。たとえば、中国・朝鮮停滞史観ひとつとっても論ずるべき問題は多い。

### Q & A ・ & コメント

講演終了後、短時間の質疑応答が行われた。

「司馬の社会的な影響力を過大評価しているのではないか」、「バブル発生と司馬の作品との直接的な関係は検証できるのか」、「日露戦争の評価に関しソ連の脅威を軽視しているさらいはないか」に關して質疑応答があった。（発言者は安原和雄氏、水沢周氏）



このあと「ブンブンミーティング」に入り、講演に対する感想と質問を討議した。八つに分かれたテーブルで二十分間の討議のあと、各テーブル三分ずつの発表である。この討議は、時間制限が緊張感をもたらし、良かったという意見が多かったが、初めて出席した会員からは、「何だか要領が分からないうちにドンドン進んでしまつて面食らつた」とする声もあった。

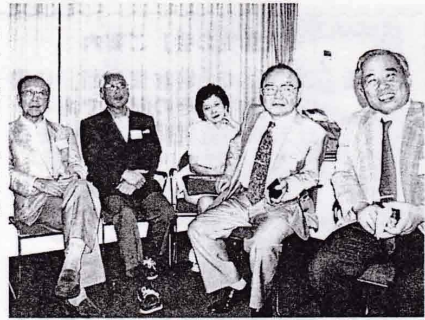
#### 中村講演に対しては

「久しぶりに本格的でアカデミックな話を聴いた」、「司馬の小説を深く考えないで読んでいたが歴史家から見るとああいう風に解釈できるのか」、「学者というものは小説に對しても随分厳密な要求をするものだ」。

「中村教授は司馬批判と言っているが本当は司馬が好きなのではないか」、などと新鮮な切り口が、好意的に評価されたと言える。

一方、「小説と歴史はもともと舞台が違うのだから歴史の論理で小説を斬るのは問題がある。」、「たかが作家の言説に学者が真面目に批判をくわえるほどのことはない」という、歴史と文学の根本に横たわる問題に広がるコメント





トや、批判もあった。

中村教授は一つ一つ丁寧に答えられたが、「国民的大作家を批判するのは、やはり、損な役回りです」と苦笑される一幕もあった。

質問、意見は講演の中ですでに触れられた問題を確認するものもあったが、これは講演がポイントを正確に突いていたこと、会員の問題意識が真つ当であることの反映であると理解したい。

簡単に結論が出るテーマではないが、最後のコメントにあった泉三郎氏からの「司馬漬けを食べるときには中村屋の海苔も一緒にどうぞ」というユーモア溢れる一言が当日の全てを表現しているように思われる。

アンケートから

歴史小説はやはり文学であり、歴史上の人物を借りた創作であると思う。知らず知らず精神的な指導者にされて、本人も矛盾を感じたのではないだろうか。鳥瞰的視野で歴史上の人物を描けても、自分については見通せなくなったのではないかなみの作家ではない。坂の上の雲で世の脚光を浴びた頃、当時の世論は全くその逆で独り往く作風であったが、一人の批判者もいなかった。

日本にもこんなサロンがあったんだ。これだけクオリティの高い話題が談笑のうちに交わされるといいうのは嬉しい驚き。

「司馬史観」：史観を付けて呼ばれる作家は何人くらいいましたか？

司馬遼太郎についての講演は大変すばらしいものでした。議論の貴重な資料を提供していただき、いろいろ考えることをシゲキされました。

講演そのもの、中村先生の熱心な話ぶりや質疑に対する柔軟な応答、会場からのウイットに富んだ意見、周到綿密な司会進行、どれをとっても素晴らしい会でした。

ブンブンミーティング：誰もがホンネで話せて大変よろしい。しかもワンクッション置いて発表するから匿名性があり、会場の生の声があるのまま聞けるところがミソ。

自分の意見を自分の言葉でしゃべっているのがこの会の貴重なところである。

同じ二時間、三時間でもこれだけの濃密な時間はほかにない。

各分科会

活動だより

記

一年経って久米の文章にも慣れてきたせいか、このところスムーズに進むようになりました。指定された範囲をそれぞれが読んできて、自分の興味のあったところを朗読し感想を述べます。そしてそれについて参加者からもいろいろの意見、感想が交換されます。それがすごく刺激的で、面白く、教えられることも多い。九月で英国編を終わりに、十月にはいよいよ花のバリエを訪れます。

未来

第二年度に入ったので、さらに現実の政治に密着して考えようと、現役の政治家をゲストに招いて懇談することにしました。九月には北海道選出の民主党の参議院議員、峰崎直樹氏を、十月の例会には東京都選出の話題の新議員、中村敦夫氏を招きます。さてどんな議論が展開するか、大変楽しみです。どうぞふるつてご参加下さい。なお、我々は決して一党一派

歴史

歴史部会はこの一年、「国のかたち」としての憲法の勉強をしてきました。その成果の上に今回の「司馬史観を通じてみる近現代史」がありました。現代の日本を考えると、過去の歴史をしっかりと把握しておくことが必要です。その意味でも司馬論を一回で終わりにするのは惜しい。そこで次回のテーマは司馬史観・再論ということになりました。

国際交流

夏の終わりに一日ツアーをと思いましたが、久米美術館の都合もあり延期しました。そこで阿川尚之の本、「トクビルとアメリカへ」を題材に一度勉強会をやるかと計画しています。岩倉使節が訪ねる四十年前になりましたが、フランスの若き貴族、アレクシ・ド・トクビルがアメリカを旅します。そして書いたのが「アメリカの民主主義」です。同じアメリカを訪ねたフランス人と日本人、その旅の様子や比較が大変興味あることです。

『米欧回覧の会』ご案内

**趣旨** この会は「岩倉使節団」に興味を持ち、その記録である、「米欧回覧実記」に関心を抱く人々の集まりです。この大いなる旅と「実記」はまさに「温故知新」の宝庫と言えましょう。この素材を媒体にして歴史をふりかえり現代の直面する諸問題についても自由に語りあおうという会です。

**会員** 上の趣旨に賛同する人なら誰でも入会できます。

**例会** 年に4回くらい会合をもつ予定です。

**事業** 次のような活動をする予定です。テーマ別グループ活動・映像サロン・講演会・旅行会研究会・シンポジウムなど。

**機関誌** 年に4回程度機関誌を発行し、活動報告や会員の意見発表、情報交換の媒体とします。

**幹事** 会員の中から、代表1名、幹事数名を選び、運営を担当します。

**会費** 年会費3,000円とし、主として通信費および機関誌代に充当します。例会・研究会・講演会などについては、その都度の会費とします。

**事務局** 当面は『ミササ・オフィス』に置きます。

〒192 八王子市元横山町1-14-16  
-0063 TEL0426-46-1949  
FAX0426-46-8700

入会申込

氏名・連絡先（自宅或いは勤務先の住所・TEL・FAX）現職&キャリアを事務局までFAXまたは郵便でお送りください。  
なお、年会費は郵便振込が便利です。

00180-2-580729

米欧回覧の会

〈催し案内〉

★第11回例会

日時：1998年10月17日（土）13：00～  
場所：国際文化会館ホール

TEL：03-3470-4611

テーマ：この日本はどうなるか、この日本をどうするか。  
ゲストスピーカー：中村敦夫参議院議員

★分科会

●実記を読む会

日時：9月10日（木）18：30～  
英国編（最終コース）

10月8日（木）18：30～

仏国編（麗都パリへ）

場 所：

クラウン・インターチェンジ・プログラムス内サロン

TEL：03-5469-2090

会費：3,000円（飲食代込み）

●現未来部会

日時：9月16日（水）18：00～21：00

場 所：国際文化会館Dルーム

テーマ：現代日本の政治・経済・社会

ゲスト：峰崎直樹参議院議員

●歴史部会

日時：10月2日（金）18：30～21：00

場 所：国際文化会館Dルーム

テーマ：司馬史観・再論

事務局より

★年会費の更新について

更新のご案内方法が徹底しておらず、ご迷惑をおかけしております。

各会員宛に更新日前の会報（NEWS）送付時にご案内と振込用紙を同封しております。今後共よろしくお願い致します。

※ 編集後記

「ノモンハンの夏」、「刑事たちの夏」、「大蔵省の夏」、「長銀の夏」、日本はまさに「異常景象の夏」でした。

さて、百二十五年前、岩倉使節団の本隊が長旅から帰国するのが九月十三日、一足先に帰国していた大久保利通はその夏、手詰まりの状況を見越し長期休暇をとって旅に出ます。箱根を経て富士に登り紀州から有馬にまで足をのばして温泉につかっています。そのころは如何、在欧の村田新八、大山巖宛の手紙にこう書いています。

「当今の光景にては人馬とも倦きはて不可思議の状態に相成り候、追々役者もそろい、秋風白雲の季節にいたり候わば、元氣も復し見るべくの場合もあるべく候」

明治六年の政変を前にした嵐の前の静けさです。大久保は英気を養い悠々と策を練っていたにちがひありません。さて秋風白雲の季節には平成十年の世にもひと芝居ありますかな。